

# 共に生きるために



2021<sup>年度</sup> 事業報告書

April 1, 2021 - March 31, 2022



学校法人 アジア学院

2021年度は新型コロナの影響で、海外からの学生が一人も入国することができないというアジア学院始まって以来の年となりましたが、国内から4名の学生に恵まれ、12月に無事に研修を終えることができました。想定外の事態の中で、私たちは今、自分たちの置かれている状況、自分たちに与えられている使命、行すべきことについて何度も考え、議論し、皆で協力しながら実行してきました。それは時に混乱や不安を生みましたが、一方で恵みの時でもありました。

例えば今年は、国内で難民申請を行いながら将来母国の発展に役立つ技術と知識を得たいと願うギニア人の女性を学生のひとりとして迎えることができました。そのことでアジア学院は国内に在住する難民の実態、また増加の一途をたどる世界の難民をめぐる事情を初めて自分事として捉えることができました。

昨年2月に起きたミャンマーのクーデター勃発以来、90人を超えるミャンマー人卒業生に思いを馳せる日々は続いています。9月に支援募金を開始し、これまでに約80万円の支援金を、危険な状況下で避難民支援を行う卒業生たちに届けることができました。しかしミャンマー国内や近隣国に多くの難民を生み出している状況は一向に変わらず、このこともまた、命をかけて安全な生活を求めて移動する世界中の難民について深く考える機会を私たちに与えました。聖書で神様が私たちに求める「寄留人」に対する愛の行いを、私たちはアジア学院コミュニティでどう実現できるか、これからも考えていきたいと思えます。

研修に関しては、昨年度に引き続きコロナ禍の影響で、県外での研修の多くが中止または縮小されました。また少人数での農場管理やコミュニティ形成もチャレンジ多き年となりました。しかし少人数ならではの利点も多くありました。学生一人ひとりの活躍の場が必然的に増え、職員の目も十分に行き届きました。「制約」を新しいものを生み出す機会と捉え、柔軟性、創造性、レジリエンス、寛容であることが常に試されました。これは楽なことではありませんでしたが、コミュニティであることが一人ひとりを支えました。

外部から多くの訪問者を受け入れられない状況は、地元にも目を向ける機会ともなりました。今年はこちら那須塩原市で子ども食堂を展開するグループ、有機農産物の生産者、販売者など、安全でおいしい食べものから人の、とくに子どもたちの健康と幸福を作り出すことに関心のある方々、また行政とも新たな関係が生まれました。アジア学院のキャンパスを五感を使って堪能する「いのちって何だろう？」というプログラムを作り、多くの地元の子どもたちや大人たちに体験してもらいました。これを機に、地域の学校に活用してもらえるESD（持続可能な開発のための教育）プログラムをもっと積極的に開発していきたいと意欲が高まったことも今年の大きな収穫です。

まだまだ世界はパンデミックの中ですが、その状況の中でもアジア学院を覚えてご支援くださった皆様一人おひとりに心からの感謝を申し上げ、ここに2021年度のご報告をさせていただきます。



学校法人

# アジア学院

アジア農村指導者養成専門学校



星野 正興  
理事長



荒川 朋子  
校長

共に生きるために  
2021年度 事業報告書

英文翻訳 江村悠子  
表紙イラスト 藤嶋トーマス逸生  
© 2022年 学校法人アジア学院



## 目次

### 農村指導者を育てる

- 4 人生の背骨になるような学び
- 8 農村指導者研修プログラム・カリキュラム

### コロナ禍でのコミュニティ・ライフ

- 9 それでもアジア学院はアジア学院か
- 11 コミュニティメンバー一覧

### オープン・ラーニング みんなの学び舎

- 12 一緒に農と食を知る

### アジア学院のフードライフ

- 14 共存共栄の道
- 15 農産物生産量
- 16 動物たちの環境を改善して
- 17 食べものへの関心と挑戦
- 17 畜産の健康と衛生

### サポーターと共に

- 18 アジア学院を共に作る仲間
- 19 国境は閉ざされても、関係は開かれて
- 20 困難をチャンスに変える、新しい視点

### 農村を動かす卒業生たち

- 22 内戦に巻き込まれた卒業生たち
- 24 移住の現実と農村開発
- 25 1人の子どもに1羽の鶏

### その他のトピック

- 21 エネルギーと資源
- 26 会計報告
- 28 2021年度卒業生

# 農村指導者を育てる 農村指導者研修プログラム

*Nurturing Rural Leaders*



アジア学院の研修の中で、私が困難に感じたのは「時間管理」「人間関係」そして「自信を持つこと」でした。高校生との交流授業では、多くの人に向き合う経験ができました。

また学院の授業で栄養について学びましたが、母国の人々の健康を守るためにとても必要な知識を得ました。有機農業実習では、ボカシ肥と土着微生物が私にとって一番の学びです。

ファトゥマタ・ディアライ・バー（学生）

# 人生の背骨になるような学び

2021年度

農村指導者研修プログラム報告

2021年度の研修を始めるにあたり、右記の目標に加えたのが「それでも最高の研修を」という一文でした。昨年から続く新型コロナウイルスの世界的流行が、アジア学院の研修に多くの困難をもたらしたのは事実です。最も大きな影響を与えたのは、入学の決まっていた27名の海外の学生が一人も来日することができなかったことでした。入国制限が緩和されれば9月から第二期研修を開始することも視野に入れていましたが、結局それさえも実現しませんでした。この入国制限はアジア学院のみならず日本全国の学校でも同様で、今年度は留学生全体の74%が来日できなかったといえます。しかしそのような状況にあっても、多くの人々に支えられながら、3名の日本人学生と1名の日本在住のギニア人学生が無事に研修を完遂することができました。

コロナの影響は、入国制限のみならず他の多くの場面でも起こりました。県外での研修は中止や縮小も多く、計画していても直前でキャンセルとなるケースもありました。また少人数での農場管理は困難を極めました。通常ならば25名から30名の学生が4つのグループに分かれて、朝夕の作業で家畜（ヤギ、豚、鶏）と畑、料理を担当します。しかし4人という学生数から、今年はグループは1つしかありませんでした。しかしながらこの少なさこそが、今年の学生たちにとっての利点ともなったのです。

## 柔軟性を大切に

アジア学院は元々1学年の人数に上限を設けた少人数教育ですが、それでも一人一人の学生の理解度を全て把握することは困難です。でも4名であれば、それは可能となります。学びのニーズや学習進度、理解度を把握し、わからない分野や単語のフォローアップに時間をとることもできました。一人一人と時間をかけたコンサルテーションとコーチングを行い、さらには4人のための授業に職員が3人つくこともあり、いってみればいつもましてとても贅沢な研修だったと思います。またいつもの人数の6分の1以下ということは、プレゼンテーションやリーダーシップの機会が頻繁に回ってくるということでもあります。ある職員が学生の一人に「今年は人数が少ないから、朝の集会で話をする当番もたくさんだね」と同情しながら言ったところ、その学生は嬉しそうに「そうなんです。いつもだったら、ここまでの回数をやらせてもらえることはないでしょう。僕たちはラッキーですね」と答えていました。

「柔軟であること」「全てを学びの機会ととらえること」「いつも前向きに取り組むこと」、これらはいつも職員が研修上心掛けていることでもあり、学生たちにも伝えていることですが、それがクリアに表面に出てきたのが今年の研修であったともいえます。

## 教務課の ミッションと目的

教務の使命は、学生のために適切な研修プログラムを準備し、維持することである。この研修を通して、学生は最高の農村指導者となるために学び、成長することができる。

\*

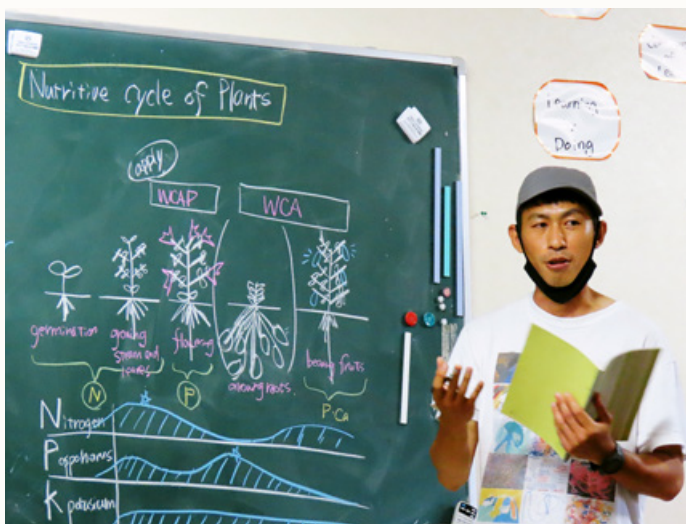
## 2021年度 教務目標

学生にとって有意義で  
価値のある研修を

1. コロナ感染症対策で最適な方法を模索する
2. オンラインをうまく用いる
3. スケジュールの柔軟性



大柳 由紀子  
副校長・教務主任



## 少人数で新しい試み

いくつかの「初めて」がありました。収穫感謝の日は初のオンライン開催となりました。来日できなかった海外学生とオンラインで繋いでディスカッションをし、インドネシアやケニアの卒業生にはオンライン授業をやってもらいました。もちろん対面で実現できればいいと思うのですが、同時にどこに住んでいる人とでも気軽に（時差さえ気を付ければ）つないで授業やディスカッションができるというのは、世界中とつながりがあるアジア学院にとっては大きな良い変化となりました。月に一度、卒業生に朝の集会を担当してもらうことになり、インドネシア、インド、タイ、スリランカ、フィリピン、ミャンマーの卒業生たちから話を聞くことができました。食と消費行動を考える新しい授業も行いました。卒業生たちの活動から「農村指導者とは何か」を学ぶ授業も実施しました。新たに3か所、栃木県内の有機農家を見学研修に加えました。農業の教育的背景がない学生たちに、農業や開発に関する用語の意味を調べて理解するセッションも設けました。難民申請者であるファティマを学生として迎えたことから、難民問題について考えるワークショップも実施しました。少人数で農作業が終わらないことから、職員もまきこんでのコミュニティワークを何度も行いました。これら全てが「いつもの」アジア学院の研修に加わったことで、学生たちは新たな学びを得ることができたのです。

## かけがえない学びを

学生の一人は、研修の最後にこう述べています。「学生生活は終わりつつありますが、同時に新しい人生の始まりでもあると感じています。アジア学院ではレポートで書ききれないほどの多くの貴重なことを学びました。それは、常に命や世界と共にあるアジア学院の生活でしか得られないと思います。これからも問いを持ち続け、人生の背骨となるよう

アジア学院では今までにない体験をし、自分がそれにどう反応するのか、自分はどう変わっていきけるのか知りたと思っていました。

見学に行った非電化工房では、当たり前と思っている常識を疑い、どうしたら良くなるかという考えから、多くのことを学びました。

また、自然農業の授業では、有機農業にもさまざまな形や考え方があることを知ることができました。

松井 潤（学生）

な学びを宝としながら、自分らしく生きていきたいと思っています。そして、たとえ困難に直面しても、今を生き、自分を見つめ、この一年を過ごしたように、人生を豊かにしていきたいと思っています。」

今年の研修が、学生たち一人一人にとって「それでも最高の研修だった」と思えることを信じ願っています。



## 🔦 研修のハイライト



4月  
わずか3名の日本人学生のみで始まった研修。



6月  
4人目、日本在住で難民申請中のギニア人、ファティマが学生として参加。



10月  
オンラインになった収穫感謝の日。今年のテーマは「進もう。感謝と共に」



11月  
西日本研修で水俣と広島に。



12月  
最終発表の「同じ人間として共に生きる」が印象的でした。



12月  
無事に卒業を迎えました。

2



1. 様々な有機農業技術を学ぶ
2. 畑も家畜もリーダーシップも実践から
3. みかん山から水俣湾を望む

## 講義一覧

### 指導者論

アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型農村調査法	荒川 朋子、大柳 由紀子
自律学習	大柳 由紀子
時間管理法	ティモティ・B・アパウ
プレゼンテーション技術	大柳 由紀子、スティーブン・カッティング
ファシリテーション技術	大柳 由紀子
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカーリー、ティモティ・B・アパウ
報告書作成指導	キャシー・フローディ
平和と正義と和解	石原 明子* (熊本大学)
尊厳	ジェフリー・メンセンディック* (桜美林大学)
農村指導者とは誰か	スティーブン・カッティング

### 持続可能な農業・技術

有機農業	荒川 治
野菜・作物概論	荒川 治
稲作技術	荒川 治
畜産概論	大谷 崇、眞木 凌
養鶏技術	ティモティ・B・アパウ
作物病害虫管理	荒川 治、櫻井 将伸
家畜衛生と疾病管理	大谷 崇、ティモティ・B・アパウ、眞木 凌
化学農業の危険性	櫻井 将伸
熱帯における自然農業	村上 真平* (全国愛農会会長)
生産者と消費者の提携	戸松 礼菜* (帰農志塾)
バイオガスワークショップ	桑原 衛* (NPOふうと代表)
有機農業のマーケティング	リディア・ナイバホ* (11年卒業生)
農業技術実習	荒川 治、櫻井 将伸
畜産技術実習	大谷 崇、ティモティ・B・アパウ、眞木 凌
肉加工実習	大谷 崇、小出 秀夫* (ノイ・フランク那須)

### 開発論

環境と開発	佐藤 真久* (東京都市大学)
栄養概論	金森 郁美
共助組合論	ギルバート・ホガング
ローカライゼーション	鎌田 陽司* (NPO 法人「懐かしい未来」代表)
ジェンダー論	荒川 朋子
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	坂原 辰男* (NPO 田中正造大学)
気候変動教育	永田 佳之* (聖心女子大学)
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
日本の有機農業運動と JA	大柳 由紀子
SDGs とアジア学院カリキュラム	阿部 (チャタジー) マノシ
SDGs と全キャンパスアプローチ	荒川 朋子
少数民族と働くということ	ギルバート・ホガング
環境とゴミ問題	丸谷 一耕* (NPO 法人 木野環境)
フォークで投票を	阿部 (チャタジー) マノシ
日本のホームレス問題	大柳 由紀子、阿部 (チャタジー) マノシ

### 卒業生セミナー

組織的持続可能性	ウェスリー・リング* (93年卒業、99年 TA・インドネシア)、 タビタ・ワウル* (96年卒業・ケニア)
----------	---

### 有機農業実習

野菜作物：ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、自然農薬、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り  
 畜産：養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎  
 肉加工：ソーセージ、ハム、ジャーキー

### 農場管理活動

グループによる農場管理（野菜作物栽培、および畜産管理）  
 フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）  
 グループリーダーシステム

### その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈り、森林管理など）、  
 内的成長を促す活動（朝の集会、コンサルテーション、リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、  
 収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、  
 農村地域研修旅行、西日本研修旅行など

研修時間総計：1,864 時間

\* 特別講師

## 研修でお世話になった方々 (敬称略、順不同)

### 農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子 美登・金子 宗郎、田下 隆一、桑原 衛

### 見学先・交流団体

【栃木県】足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所跡）、  
 渡瀬川遊水池、宇都宮北高校、(教)西那須野教会、(教)那須塩原教会、  
 (教)氏家教会、(教)小山教会、(教)益子教会

### 農村地域研修

【栃木県】森林ノ牧場、非電化工房、まんまる農園、ドンカメ、陽だまり農場、  
 月 noco、古谷農産、グリーンファーム水口、館野ファーム

### 西日本研修旅行

【熊本県】大澤菜穂子、からたち、水俣病歴史考証館、水俣病資料館、  
 坂本しのぶ(証言者) 【広島県】広島平和記念資料館



# コロナ禍での コミュニティ・ライフ

Community Life under COVID-19

それでも  
アジア学院は  
アジア学院か  
危機にあって、  
アジア学院  
コミュニティの  
本質を再発見する。



真木 メレディス  
共同体生活担当

2021年度はアジア学院の歴史の中で今までにない年でした。海外から学生として応募した者が一人も農村指導者研修プログラムに参加できなかったのは初めてです。学生は日本人3名と、すでに日本に滞在していたギニア人1名の計4名。学生だけでなく、海外の研究生やボランティア、インターンも、厳しい入国管理で来日することができませんでした。

コミュニティへの影響は計り知れません。まず、どの部門も人手が足りず、普段はチームで行う仕事の多くを1人か2人でこなさなければならなくなりました。そしてキャンパス内に住むメンバーが過去最少になったことで、コミュニティそのものの力学に大きな変化が生じました。学生も日本語を話せない人も少数派になり、ボランティアや学生の中で無宗教の人が大半を占めました。世界中の農村指導者を養成するこの学校が、海外からの学生なしにどう機能するのか、私は何度も疑問を抱きました。

## 海外からの学生をなくして

アジア学院は創立以来、多文化・多言語環境であることを誇りとし、様々な背景、文化、宗教を持つ人々が英語を使って共に生活し、仕事をしています。私も含め、多くの人にとって学院の魅力は、世界中の人々と出会う場所であることです。学生は、農業技術や建築技術、信仰の伝統や礼拝の形式、踊り、音楽、衣服、料理など、豊かな文化遺産を携えています。これらのすべてが、アジア学院でとりわけ大切にされている「分かち合いの生活」に貢献しています。またコミュニティの多様性は、日常生活の中で人々が違いを乗り越えることを余儀なくされる健全なカオスを生み出します。誤解、連絡ミス、衝突、意見の相違はすべて研修に不可欠な要素です。

2021年度は様々な癖のある英語で互いに理解しようとする代わりに、日本語での会話をよく耳にしました。以前は皆でバスに乗り、おしゃれな格好で教会に向かったものですが、今年度はワゴン車一台分も人がいませんでした。寮の部屋も食卓も空いた状態で、日本の国境が再び開かれるのを待つばかりでした。海外からの学生をなくして、アジア学院はアジア学院といえるのでしょうか。

## 答えはアジア学院の「柱」にあった

その答えをアジア学院の「3つの柱」に見出しました。「フードライフ」「仕える指導者」「学びのコミュニティ」。パンデミックによってアジア学院のユニークな働きは止まらず、私たちは今でも土を耕し、家畜を育て、日々の食料を生産しています。今でも一緒に植え、収穫し、調理し、食べています。人数が減ったことで、より一生懸命、工夫して働かなければならなくなり、一人ひとりの存在が不可欠であることを思い知らされました。お互いのために犠牲を払い、セクションを越えて協力し、コミュニティを守るために最善を尽くす、仕える指導者を実践する機会もこれ





まで以上に増えました。また2年連続でコロナ感染者ゼロを維持することができました。

学びのコミュニティについては、メンバーの組み合わせがその年その年で異なり、前もって準備不可能な豊かな学びの機会を生み出していますが、今年も例外ではありませんでした。日本人が大半を占めるコミュニティは、アイデンティティ、言語、文化、そして自分自身をどう定義するかについて、より深く考えるきっかけとなりました。例えば、ある女性はヨーロッパ人の祖先を持ちながら日本で生まれ育ち、別の女性は民族的には日本人でありながら海外で生まれ育っています。さて、どちらがより「日本人」でしょうか。英語を母語とする人は、少数派であることがどのような感じなのかを味わいました。日本語を話す職員は、日本語を喋るだけで知らず知らずのうちに排他的になり、相手を遠ざけてしまうという厳しい現実と直面することになりました。無宗教のボランティアの多くは教会や聖書研究会に参加するようになり、コミュニティの中に一人いるイスラム教徒は私たちに多くのことを考えさせてくれました。

海外の学生がいつ到着するか、早く会いたい気持ちでいっぱいです。\*しかし私たちは学院の使命を実践しつつ、希望と決意を持って待っています。共に生きるために。

\*2022年4月以降、海外からの学生が順次ビザを取得し、アジア学院に到着しています。

## 📊 コミュニティの構成



44人

2021年度  
人数

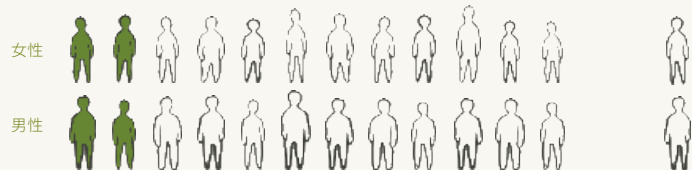


70人

2015～19年度  
平均人数

学生：4人対24人

研究生：0対2人



職員：23人対24人



長期ボランティア：17人対13人



## 職員

荒川 朋子	校長
荒川 治	副校長、教育部長、農場長 (フードライフ課長)
大柳 由紀子	副校長、教務主任 (教務課長)
佐久間 郁・ヴェロ	事務局長 (総務課長)
キャシー・フローディ	国際関係課長
阿部 (チャタジー) マノシ	教務課 (学生募集)
スティーブン・カッティング	教務課 (卒業生アウトリーチ)
田中 順子	教務課 (図書)
ティモティ・B・アパウ	チャプレン、教務課 (共同体生活)、 フードライフ課 (畜産)
ジョナサン・マッカーリー	チャプレン、教務課 (共同体生活)
真木 メレディス	教務課 (共同体生活)
マッカーリー 里美	教務課 (共同体生活)
櫻井 将伸	フードライフ課 (野菜・作物)
大谷 崇	フードライフ課 (畜産)
真木 凌	フードライフ課 (畜産)
金森 郁美	フードライフ課 (FEAST)
ラビアル・ラモン・J・エスメリオ	フードライフ課 (FEAST)
陳野 くに (4月～8月)	フードライフ課 (FEAST)
井澤 聡	総務課 (総務補佐)
君嶋 満恵	総務課 (会計)
杉崎 由佳 (1月～)	総務課 (会計)
安藤 香	総務課 (庶務)
山下 崇	募金・国内事業課長 (教育プログラム・ 那須セミナーハウス主事)
ルイバ・ヴェロ	募金・国内事業課 (那須セミナーハウス補佐・管理人)
中山 紀子	募金・国内事業課 (広報・教育プログラム)
佐藤 裕美	募金・国内事業課 (販売・広報)
福島 昌代	募金・国内事業課 (食品加工)
江村 悠子	募金・国内事業課 (支援者サポート)

## 業務委託

藤嶋 トーマス 逸生	ブランディング、ID システムデザイン、メディアデザイン
八木沢 淳	メディアデザイン、印刷物編集

## ボランティア

### 通いボランティア

フードライフ課 (農場)：茶園 いずみ、林 哲  
 フードライフ課 (FEAST)：東 千尋、木村 裕子、鈴木 由美、高村 京子、村山 佳奈子  
 募金・国内事業課 (販売)：猪俣 美恵、柏谷 重明、杉田 万由子、堀内 紀江、三宅 隆史、  
 クリスティ・アパウ  
 総務課 (営繕)：清水 益夫、伏見 卓、井出 幸男  
 総務課 (経営)：早坂 孝行

### バケレルセンター (放射能測定室)

阿久 津隆 (～12月)、高嶋 幸雄 (～12月)、西川 峰城、藤本 渉平 (兼販売)

### 長期滞在ボランティア

教務課 (学生募集)：マリア・アビガイル・ヘルナンデス  
 教務課 (共同体生活)：ユロン・ワン (兼学生募集・FEAST)  
 フードライフ課 (農場)：荒谷 賢、池谷 海人、井上 柊哉、金井 美紀、田中 里奈 (兼卒業生  
 アウトリーチ)、鈴木 千尋 (兼販売)、山口 晴香 (兼 FEAST)、荒谷 佑 (兼卒業生アウトリーチ)、  
 フードライフ課 (FEAST)：猪又 菜緒、猪狩 真奈美 (兼農場)、武本 かなみ (兼農場)  
 国際関係課：エミリー・ボーデル (兼学生募集)、ジョン・アルフレッド・リクテン (兼農場)  
 募金・国内事業課 (販売)：並木 レベッカ (兼総務・FEAST)

## 役員

### 理事長

星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師

### 副理事長

遠藤 抱一 (～5月) アジア学院首都圏事務所事務局長  
 山本 俊正 (6月～) 元関西学院大学教授

### 理事

荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長  
 後宮 敬爾 日本基督教団霊南坂教会牧師  
 門脇 英晴 (株) 日本総合研究所特別顧問  
 小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事  
 佐藤 範明 ホテルサンバレー那須顧問  
 永田 佳之 (6月～) 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授  
 矢萩 栄司 日本聖公会下館聖公会牧師  
 山根 正彦 (学) 香川栄養学園 常務理事

### 監事

大久保 知宏 藤井産業 (株) 執行役員 総務部長  
 村田 榮 那須ワイズメンズクラブ

## 評議員

荒川 治 アジア農村指導者養成専門学校副校長  
 荒川 朋子 アジア農村指導者養成専門学校校長  
 粟谷 しのぶ 弁護士、戸野・田並法律事務所  
 飯塚 拓也 (6月～) 日本基督教団関東教区宣教部委員長、  
 竜ヶ崎教会牧師  
 伊藤 幸史 カトリック新潟教区司祭  
 岩谷 幸子 (6月～) 全国友の会中央部中央委員、横浜友の会  
 宇野 三恵子 (6月～) 聖心会日本管区管区長  
 海老根 智仁 (6月～) (株) レジェンド・パートナーズ取締役会長  
 遠藤 抱一 (～5月) アジア学院首都圏事務所事務局長  
 大柳 由紀子 アジア農村指導者養成専門学校副校長  
 門脇 英晴 (株) 日本総合研究所特別顧問  
 菊地 功 カトリック東京大司教教区大司教  
 小海 光 公益財団法人 ウェスレー財団代表理事  
 佐久間 郁・ヴェロ アジア農村指導者養成専門学校事務局長  
 千 相鉦 在日大韓基督教教会札幌教会主任牧師  
 長嶋 清 (～5月) 元アジア農村指導者養成専門学校職員  
 永田 佳之 聖心女子大学現代教養学部教育学科教授  
 潘 炯旭 日本基督教団西那須野教会牧師  
 福本 光夫 (～5月) (学) 西那須野学園 西那須野幼稚園園長  
 星野 正興 日本基督教団愛川伝道所牧師  
 丸谷 一耕 (6月～) 特定非営利活動法人木野環境代表理事  
 山下 崇 (6月～) アジア農村指導者養成専門学校職員  
 山口 和枝 (～5月) 元全国友の会代表  
 山根 正彦 (学) 香川栄養学園 元常務理事  
 米田 ミチル (～5月) 聖母訪問会総長  
 セラジーン・ロシート NGO/NPO コンサルタント

## イベント・プロジェクトハイライト



5月 English Farm for Family



8, 9月 オンライン・カレーワークショップ



6, 7, 9, 10月 有機農業講座

# オープン・ラーニング みんなの学び舎

Open Learning Programs



## 一緒に 農と食を知る

### 募金・国内事業課 教育プログラム報告

コロナ禍で多くの状況が変わり、新たな不安や悩みを抱えた人たちと出会った2020年を踏まえ、2021年度は「人と共感し、人を癒し、人に希望を与える」というテーマで始動しました。土に触れ、直接会話をし、食事を共にすることができるアジア学院の役割を再認識した上でプログラムを検討し、予約もびっしり埋まっている状況でしたが、コロナ感染拡大による緊急事態宣言や蔓延防止対策等で訪問者を受け入れられない状態となってしまいました。結果として2020年度よりさらに少ない訪問者数となっており、昨年よりは良い状況になるだろうと期待していた私たちの落胆は大きなものでした。

しかし、アジア学院を感じてもらうために何かできることはないかと考え、「オンライン」と「地元」をターゲットにいろいろなことに挑戦していきました。

#### オンラインで行動

「オンライン」ではキャンプ、ワークショップ、キャンパスツアーを行いました。その中でもカレーワークショップは大きな成果と可能性を感じる事ができました。参加者宅に事前に郵送したアジア学院の農産物（豚肉、野菜、米）を使って、各個人がオンライン上のインド人スタッフと共にスパイスカレーを作りました。画面越しでもいものちと食べ物の大切さを共にすることができました。

#### 地元とともに

もう一つ行った活動は、地元の方々との交流プログラムです。日帰りでアジア学院の有機農業を学べる全4回の「有機農業講座」や、親子向けのキャンパスツアーを実施しました。また、年に1回の開催だった古本市を年4回に増やしたところ、地元から多くの方にお越しいただけました。以前はアジア学院

の価値を伝えようという意識が遠くへと向かいましたが、コロナ禍で改めて地元が目がゆき、地域の方々とかかわるきっかけを持つことができました。

コロナ禍でもあきらめることなく挑戦を続けた結果、2021年度の国内プログラム（アジア学院企画）収入は2019年度に迫るところまで回復させることができました。

2021年度	2020年度	2019年度
488万円	241万円	504万円

コロナ禍をはじめ、依然として先を読むことが難しい社会状況ですが、アジア学院を訪れる方々が安心でき、自然体でいられ、わくわくし、もう一度帰ってきたいと思えるような企画を2022年度も進めて参りたいと思います。



山下 崇

募金・国内事業課長  
(教育プログラム・  
那須セミナーハウス主事)



7, 12月  
チャイ・チャット



4, 6, 11, 2月  
古本市



スタディキャンプ

## スタディキャンプ参加団体

日本写真芸術専門学校、共愛学園高校、JELA、  
学生キリスト教友愛会、同志社大学国際居住研究会、  
農村伝道神学校、東京ユニオン教会、佼成学園女子高校、  
筑波大学附属坂戸高校、パーマカルチャーセミナー  
京都精華大学  
オンライン開催 ICU高校、ICU宗務部、  
明治学院大学、聖心女子大学  
日帰り開催 宇都宮大学重田ゼミ、立教大学YMCA



「離れた場所においても、  
同じ時間、同じ材料を使って、  
同じ食べ物を共有することが  
でき、人との繋がり大切さ  
を改めて感じました。

五感でのちを感じ、  
有意義な時間を過ごせたと  
感じています。」

オンライン・  
カレーワークショップ  
参加者の感想

# アジア学院のフードライフ

Foodlife at ARI



## 共存共栄の道

野菜作物報告

「**た**った4人の学生で十分な食料をつくらることができるのだろうか？」豊かな多様性をもってその機能性を高めるアジア学院ではあるが、新型コロナウイルスの影響を受け、海外からの学生を受け入れることが事実上不可能となった2021年4月、自分たちが食べる野菜の種まきをしながらこの大きな疑問が頭の中に渦巻いた。働き手の数がいつもより少なくなることは、作業を進める上で絶対的に不利だからだ。しかも4人の学生たちは全員が農作業未経験者である。

なるべく少ない労力で最大の効果が得られるように、トマト栽培には工夫を加えた。露地栽培にも適応する品種を導入し、通常のトマト栽培で行う「わき芽かき」を大幅に省略することにした。トマト苗の定植後、地表から3葉目までから出るわき芽は全部かき取る、4葉目から上に出るわき芽はすべて伸ばしたままにする「放任栽培」という手法を取

り入れた。四方八方に伸びる茎は先々で多くの実をつける。その重みで草体が折れないように竹を組んでアーチをつくるという手間はあったものの、雨よけとしてビニールで屋根を張ることもなく6月の長雨にも耐え、完全な露地栽培でもこの中玉トマトは十分な生育をみせた。結果的には75本の苗から214.4キロの収穫を得ることができたのである。

トマトの他にもキュウリやニガウリ、紫ナスや青ナスなどの夏野菜栽培にも積極的に取り組み、例年通りの収穫を得ることができた。もちろんこの成果は学生の働きによるところが大きい。自分たちが学院に集う皆の食卓を支えているのだという自負が芽生え、初めての農作業にも真摯に向き合い、額に汗することを厭わなかったからである。

このことはアジア学院コミュニティを形成する一人ひとりにも当てはまる。学生の数が少ないため、畑での作業を全員に呼びかける



櫻井 将伸  
フードライフ課  
(野菜・作物担当)

## 🚗 農産物生産量

### 野菜・作物



7,388 kg  
米



3,031 kg  
小麦



1,208 kg  
じゃがいも

### 生産量 100 kg 以上の野菜・作物

850.7 kg	たまねぎ
441.0 kg	さつまいも
342.7 kg	きゅうり
254.4 kg	だいこん
214.4 kg	マティナトマト
207.3 kg	葉たまねぎ
187.5 kg	なす(紫・青)
184.3 kg	ハヤトウリ
162.9 kg	トマト(小)
146.0 kg	かぶ
145.7 kg	はくさい
136.9 kg	レタス
117.7 kg	バターナッツ
100.0 kg	にんにく

### 畜産

55.5kg (7 頭) 山羊肉  
247 羽 鶏肉  
7 kg 鶏肉内臓



119,689 個  
たまご

54 頭  
豚肉

705.8 ℓ  
ヤギミルク

「コミュニティワーク」という時間をこれまでになく多くとったのである。田植えにはじまり、ジャガイモの収穫、大豆畑の雑草取り、ニンジンの種まきと収穫、サツマイモの雑草取りと収穫、エゴマ苗の定植、そしてコメの収穫と作業内容は多岐にわたり、夏場の暑い盛りには朝4時半から作業を開始し、大豆畑やサツマイモ畑で朝陽が昇るのを皆で見たこともあった。学生、職員、そしてボランティアの皆が力を合わせ、自分たちの世話する畑で野菜を育て上げ、自給自足の喜びを共有することができた。コミュニティに集う人の数は極めて少なかったのだが、だからこそ一人ひとりがもてる力を存分に出し合い、共に畑で働き、共に収穫し、共に食べることの喜びを豊かに味わうことができたのである。

しかし、少なからず反省点もあった。雑草管理が間に合わず、サツマイモの収量が思ったようにあがらなかった。同様にカボチャの

収量も満足いくものではなかった。手と時間が足りなかったと言えばそれまでなのだが、もう少し綿密に作業計画を立てておけば、結果は違ってきただろうと思う。

どこで何を食べても同じような食材、似たような調理法で食文化の多様性が認められにくくなっている現在、アジア学院では自分たちで収穫したものを食べている。コメはもとより、野菜だけでも70種類以上を栽培し、豚肉も鶏肉も卵も自分たちで生産している。田植え後から夏にかけて田んぼにはアイガモを放ち、田の草取りを手伝ってもらった。アジア学院では、人間も生物の一員として生物多様性の相互依存関係の中で生かされている存在であることを認識しながら共存共栄の道を模索している。人間と自然の相互関係に根ざし、互いが生きるための営みが「農」だからだ。



# 動物たちの環境を改善して

## 畜産報告



眞木 凌  
フードライフ課  
(畜産担当)

**新**型コロナウイルスにより、コミュニティの人数が減少したことによって、以前にも増して各畜産部門同士の連携を強化していく必要がありました。朝・夕のフードライフワークでは、部門間でのコミュニケーションを大切にし、人手不足を補完していました。共にこのコロナ禍を乗り越えていくんだという強い想いでこの一年を乗り越えました。

### 養鶏

養鶏部門では、今年の8月に206羽のブロイラーを飼育することができ、ワクチンや抗生物質を一切使わず、学内の穀物のみを使用し、にんにく水と音楽を用いた飼育に挑戦しました。ブロイラー飼育に用いた飼料には、食品加工の際に小麦から小麦粉を製造するときの副産物であるふすまを使用しました。その結果、206羽のうち2羽という非常に低い死亡率で、興味深い結果となりました。

### 養豚

養豚部門では、病気にならない健康な豚を飼育する為、①豚の腸内環境、②豚が生活する発酵床の環境の改善に努め、①と②の環境に共通する存在である微生物に着目しました。

①に関して、腸を整えることで万病を防ぐと言われていますが、腸内微生物を増やし、腸内環境が均衡を保つ事が不可欠であると感じ、豚に対して微生物の餌となる草などの食物繊維の給餌量を増やしました。また、豚に抗生物質を使用すると腸内微生物も死滅してしまい、病気にかかりやすくなる恐れがあり、なおかつ海外から来る学生には薬の入手が困難である可能性があることから、抗生物質に頼らない自然由来の薬の使用に力を入れました。焼酎に生姜、ニンニクなどを加えた自作の薬を代わりに与えることで、病気から回復する豚も見られました。

②に関して、発酵床がうまく機能するには、敷料として使われるおが屑、豚糞がうまく混ざり合い、微生物が分解する過程で発酵が生じる必要があります。まずは分解者である微生物を入れるところから始め、次に微生物にとって過ごしやすい環境（温度、水分、餌）を整える必要がありました。これらを行

う事で少しずつですが病気になる豚が減っていき健康な豚が増えてきました。

### 山羊・養蜂

山羊養蜂部門では外部資源に頼ることなく、学院内にある資源を最大限活用し、学院内で全ての循環を成立させるように努めました。

「山羊の森」計画では、桑やビワの苗を挿し木で生産し山羊の放牧場に植えました。葉は山羊の飼料としてだけでなく漢方としても活用し、実は食用に、残った枝葉は粉碎してマルチにしました。夏の強い日差しを遮るだけでなく、根は土壌保持、花は蜂の受粉も助

けます。学院内で再生産が可能で、かつ全ての部位が活用できるので無駄がありません。山羊の糞や乳も有機質資材として生育を助け、育てた山羊の肉や乳は全て学院内で消費します。

野菜作物部門にとっては厄介者である田畑の雑草を毎日刈り取り、山羊に与えることで部門間の協力関係を高めるだけでなく、ソーラーパネルを利用した電気牧柵の導入により、今までは利用が難しかった斜面の笹藪にも放牧し、飼料源として活用出来るようになった結果、飼料自給率は84%まで向上しました。





# 食べものへの関心と挑戦

## FEAST 報告



金森 郁美  
フードライフ課  
(FEAST担当)

2021年は、日々の食事作り当番に加えて各自の自由時間にキッチンで何かを作る学生やボランティアの姿がよく見られました。そのおかげで、その時々たくさん収穫されたものやアジア学院ならではの食材を使った様々な「おいしいものたち」がいつも食卓を賑やかにし、私たちは分かち合う共食を通して、その恵みを祝うことができました。

毎日朝夕に届けられる新鮮なヤギのミルクはそのまま飲むだけでなく、スープやシチューなどに使い、料理のバリエーションが広がりました。搾乳量が多い時期は、さらにヨーグルトやカッターチーズを作り、手作りのパンやジャムと一緒に楽しみました。



夏には大量のトマトがほぼ毎日キッチンにやってきました。トマトは様々な国の料理に欠かせない食材で、一年を通して使われる野菜ですが、アジア学院で収穫できる時期は4か月ほどで、生の状態で長く保存することはできません。食べきれない分は冷凍保存に加えて、トマトピューレ、サルサ、ケチャップに加工してピン詰めし、常温で長期間保存できるようにしました。この食品加工は学生も授業を通して学びました。

豚肉加工プロジェクトのメンバーはスパイスの配合や塩漬の方法を試行錯誤してベーコンを作り、普段の料理とはまた違うアジア学院の豚肉のおいしさを皆に伝えてくれました。

天然酵母の発酵によるパン作りはボランティアの間でレシビヤコツが受け継がれ、キッチンの片隅にはいつも誰かが世話をしているパンの発酵種があり、人が入れ替わってもパンを焼く人が絶えることはありません。そのほかにキムチやたくあん、納豆といった発酵食品づくりも行いました。発酵や料理にまつわる本が新たに図書室にリクエストされ、コミュニティ全体で発酵への興味が高まっていると感じています。

コミュニティのサイズが小さいことで、食材の消費量が全体的に想定していたよりもかなり少なくなりました。できるだけ正確に必要な量の見通しを立て、保管する場所の容量を考慮し、どれくらいの量が自給自足の生活に必要なのかを提案すること、食材を無駄にせず有効活用する道を常に模索し続けることが、食べもののいのちや皆の労働に報いるため、より一層、給食部門に求められているのだと感じました。そのためには人手が少なく作業に追われがちな日々の中でも、野菜作物、家畜、販売をはじめ他のセクションとの丁寧なコミュニケーションは、削ることのできない大切な作業であると再認識しました。

人数が多くても少なくても、この先もアジア学院のキッチン、食堂が、コミュニティの皆が集い食べもののいのちを分かち合う場所であり続けるために、FEAST\*の名が掲げる使命を追求していきたいです。

\* 給食部門の名称: Food Education and Sustainable Table (食育と持続可能な食卓) から取っている。Feast(フィースト)は英語で“ご馳走”という意味がある。

## 畜産の健康と衛生

家畜伝染病の脅威はアジア学院の畜産にとって更に現実的なものになりました。春先にはキャンパスからわずか4キロの養豚場で豚熱が発生、約4万頭の豚が殺処分になっただけでなく、ウィルスの拡大を媒介するイノシシへの感染も市内で相次ぎました。また鳥インフルエンザの感染も拡大しています。我々としてもウィルスは既に農場内に存在しているとの想定の下、それを豚舎や鶏舎内に持ち込まない対策を講じています。この異常事態に畜産職員として眠れぬ夜を過ごすこともありました。今でも毎朝、「今日も元気でいてくれ」と祈る気持ちで畜舎に向かいます。

対策としては従来の定期的な石灰散布や踏み込み消毒の実施だけでなく、豚舎や鶏舎に入る前に長靴を専用のものに交換し、更に前掛けの着用や手指の消毒を励行しています。また家畜の死体もこれまでは専用の穴を掘ってその中に投棄していましたが、伝染病を媒介する要因となるため専門業者に回収をお願いすることになりました。



大谷 崇  
フードライフ課  
(畜産)

日本では家畜伝染病が発生すると多くの場合はすべての家畜が殺処分となり、移動制限など周辺の農家にも影響を及ぼすだけでなく、適切な対策を講じていないと発生後に罰則や罰金が適用される可能性もあります。しかし同時に費用や手間のかかる対策が多く、どこまで取り入れるのが現実的か、頭を悩ませています。

これらの対策は学生の国での対応は難しい部分もありますが、アフリカ豚熱など、より危険な伝染病が流行して家畜飼育を断念せざるを得ない卒業生もいることから、目的を明確に説明し、できることから実践するように学生には提案しています。

一方で地域資源を活用して家畜の健康を保ち、病気を防ぐ取り組みも試行錯誤を繰り返しながら実践しています。豚へのお灸による発情回帰促進、鶏への緑餌給餌、山羊のピワエキス(葉の焼酎付け)による乳房炎治療などもその一つです。今後も学生や卒業生とも情報や経験を共有しながら取り組みを充実させていきたいと考えています。

今後も、アジア学院ならではの特性をうまく生かしながら健康で安全な畜産物を生産し、家畜伝染病の感染予防に日々取り組んでいきたいです。

# サポーターと共に

Together with Supporters



## アジア学院を 共に作る仲間

### 募金・国内事業報告

2020年度に続いて皆さまと直接お会いする機会が少なかったことに加え、2021年度は社会がコロナ禍に慣れたこと、海外から来日できた学生が一人もいなかったことで、支援者の皆さまのアジア学院への想いが薄れてしまうのではないかと危惧されました。しかし、そのような中でも国内寄付の総額は2020年度と同水準を保つことができました。また、お金の寄付のみならず、書き損じはがきや切手、物品の寄付で支えてくださる方があり、オンラインでのつながりを希望してくださる学校や教会があり、応援のメッセージを下さる方があり、また見えないところでアジア学院のためにお祈りくださる沢山

の方がいました。こうしたお支えの一つひとつがあっはじめて、今年度も充実した研修を行い、運営を続けることができました。心より感謝申し上げます。

「アジア学院が継続して活動していることが私自身の力になっています。」このような言葉をかけていただく度に、アジア学院は決して一人ではない、世界中の方々の想いに生かされているのだと心が温かくなりました。皆さまの想いを余すことなく生かしたいと背筋の伸びる思いも抱きました。

キャンパスに留まっている時間が長いことを生かして、初めてご支援くださった方に電話やお手紙でご支援のきっかけを伺うなど、お一人おひとりへのアプローチを心がけました。また、しばらく連絡を取っていなかった方々にコロナ禍のアジア学院の現状を知っていただくべくニュースレターをお送りし、再びつながりを持つことができました。引き続き、より多くの方々のつながりを少しずつ復活させていきたいと考えています。

また、ミャンマーの卒業生からクーデターの深刻な影響を知らされたことで、教会やキリスト教主義学校にお祈りをお願いしたり、皆さまからミャンマーへの支援金を募ったりしたことは新たな試みでした。アジア学院への直接的な支援ではないものの、皆さまと共に卒業生の現状と働きに想いを寄せることでアジア学院の使命を追求することができたことは意味深いことでした。

支援者の皆さまはアジア学院を共に作る仲間です。今後とも、皆さまにアジア学院をより身近に感じていただき、共に喜んで「共に生きる」社会を実現していきたいと願っています。



江村 悠子  
募金・国内事業課  
(支援者サポート)

# 国境は閉ざされても、 関係は開かれて

## 国際関係報告

2021年、私たちはこれまで以上にサポーターやボランティアの皆様にお会いすることができました。直接会うことはできなかったものの、電話やビデオ通話で近況を伝え、皆様の様子を伺うことができたからです。コロナ禍で「できないこと」を考えるのではなく、「できること」のアイデアを出していきました。今年度行った新たな試みは、国境を越えた移動が再開された後も続くと思います。

アジア学院をアメリカの人々に紹介するために、アジア学院北米後援会（AFARI）と協力し、「Fireside Chat（炉端会議）」と「Sustainable Thanksgiving（持続可能な感謝祭）」という2つのウェビナーを開催しました。スタッフ、ボランティア、卒業生がそれぞれの状況、機会、励ましについて話しました。参加者からは、アジア学院と長年にわたってつながっていることへの喜びや、相互の訪問を楽しみにしているとの声が聞かれました。

寄付者の方々は、変化する学院のニーズに応じてくださいました。ある支援者は、

「アジア学院が置かれている状況、学院の皆さんが一番よく知っている状況の中で、学院と共に働き、共に歩むことを約束します」と話してくださいました。例えば、当初他県への研修旅行のために寄付されたお金は、日本中の講師のオンライン講義の費用に振り替えられました。ある奨学金は一般寄付に振り替えられたり、次年度以降学生が来るまで取っておくことになりました。高額なPCR検査など新型コロナウイルス対策のための資金も頂きました。予期せぬ助成金により、WiFiシステムとオンライン環境を改善することができました。

英文ニュースレター「Take My Hand」はリニューアルし、年2回発行の12ページ構成から年3～4回発行の4ページ構成にし、毎号テーマを決めました。2021年のテーマは「変革」そして「平和と和解」でした。

海外からのボランティアとインターンもアジア学院にとって不可欠な存在ですが、2021年度は海外から4名の方が2ヶ月から2年の間滞在し、アジア学院のコミュニティを豊かにしてくれました。



キャシー・フローディ  
国際関係課

## 海外支援・協力団体

**海外ボランティア・インターン派遣機関**  
プレザレン・ボランティア・サービス (BVS) (米国)、  
合同メソジスト教会世界宣教 (米国)、キリスト教会  
共同世界宣教 (ディサイプルス、米国合同教会)  
(米国)、ウェルズリー大学 (米国)

### 海外の寄付団体

アメリカ福音ルーテル教会 (ELCA)、連帯のための  
宣教会 (EMS)、キリスト教会共同世界宣教  
(ディサイプルス、米国合同教会)、カナダ合同教会、  
合同メソジスト救援委員会 (UMCOR)、  
アジア学院北米後援会 (AFARI)

## 国内支援団体

(10万円以上の寄付・順不問)

### 奨学金

(一財) JEL A、(カ) 聖心会 (あけの星修道院)、  
日本キリスト教協議会、(公) 東京聖トモテ教会

### 教会関係

国際基督教大学教会、(教) 西那須野教会、  
(教) 霊南坂教会附属霊南坂幼稚園、(公) 聖オル  
バン教会、(カ) 大田原教会、河内キリスト集会、  
(カ) 煉獄援助修道会、(カ) 聖心会 (あけの星  
修道院)、東京ユニオンチャーチ、横浜ユニオン  
教会、(教) 阿佐ヶ谷教会、学生キリスト教友愛会

### 学校

(学) 青山学院高等部、(学) 女子学院、(学) 国際  
基督教大学高等学校

### 諸団体

(一財) アジア農村交流協会、全国友の会中央部、  
(公財) 森村豊明会、東京霞ヶ関ライオンズクラブ、  
(一財) 新倉会、帰農志塾、(公財) 全国友の会  
振興財団、(宗) 立正佼成会那須教会、日米国際  
特許事務所、(医社) サマリヤ会、ワールドファミ  
リー基金、(公社) スコーレ家庭教育振興協会、  
IKE 設計開発事務所、(公財) あしぎん国際交流  
財団



左：那須塩原教会でのアジア学院サンデー。  
21年度学生の岡田英里さんがアジア学院での  
学びを語る。

私がアジア学院を知ったのは、日本基督教団・全国教会婦人会連合・世界教会運動委員会の一員として関わり始めた2004年です。

長年、この委員会が企画実行してきたアジア学院ホームステイ・プログラム。その年の海外の学生たちが日本の家庭で2泊3日の生活体験。期待と不安を抱いてこられたと思いますが、一人一人、目を輝かして、「共に生きる」ことを体得しようと、これからの学習体験に心弾ませているのが感じられ、私達も彼らの期待に応えたいとの思いを強くしました。

彼らを家庭の一員として迎え、彼らの母国の文化、自然、気質など直に話し合えることで視野が広められ、夢も与えられ、貴重な体験をお互いすることのできる幸せを感じました。卒業式で彼らは、多くの学びを得たことの感謝を全身で表していました。

アジア学院が目指す教育がそれぞれの国で豊かに花を開いている事実、地道ではありますが、その一端に関われていることに感謝！

本田典子（サポーター）



## 困難をチャンスに変える、 新しい視点

### 販売活動報告



佐藤 裕美

募金・国内事業課  
(販売・広報担当)

**前** 年度に続き人々が自由に外出し交流することが制限された2021年度は、多くの方々と協力して発想の転換と新しい視点を模索し、過去最高売上額達成という目標以上の成果を得ることができました。

卵や豚肉をご利用頂いていた飲食店のお客様においては、苦しくも休店せざるを得ない期間が続き、お互いにタイミングを図りながら取引を続け、同時にそれに合わせた生産スケジュールを農場職員と都度確認するなど、学院内外での連絡をより密にすることを心がけました。普段よりも手間と時間がかかってしまいましたが、翻ればそれは結果的に豊かなコミュニケーションの積み重ねになり、信頼関係を深める機会となりました。

対外的には、毎月定期的に参加している地元のオーガニック・マルシェでの運営方法がワーカーズ・コレクティブ\*となったのでアジア学院としても運営に関する様々な業務への参加を増やしました。参加者全員にとって新しい取り組みでしたが、メンバー間の結束が強くなり「奉仕する指導者」の理念を具体的に実践する好機になりました。最終的にはマルシェ全体での売上が例年の1.5倍になるなど、制約のある社会環境でも困難を乗り越



え得る経験を共有できたことは意義深いことでした。

「アジアの土」のバックナンバーを読み切りサイズに分割し、卵やクッキーなど2000点以上の商品に添付する試みも行い、購入された方がアジア学院の活動を知る機会を増やしました。

困難の中で全ての細やかな業務を完遂する

ことは決して一人でできるものではありません。協働しそして成果を分かち合うことが継続する力となり、結果を導くものだと気付かされたこと、そしてそのことに関わる全ての方々に、心から感謝しています。

\* 個々の参加団体が全体の運営業務を等しく分かち合い、また責任を共有すること。

# エネルギーと資源

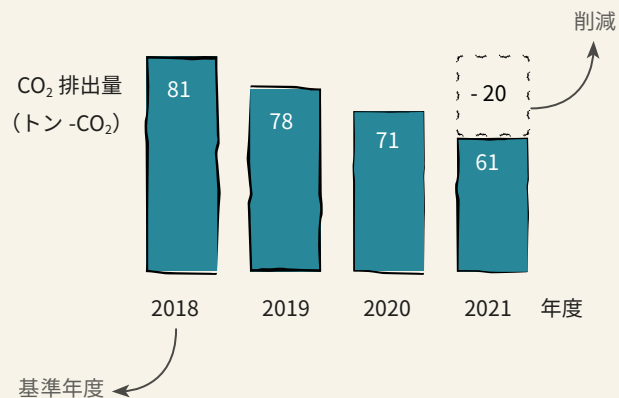
## Energy and Resource Use at ARI

2018年を基準年度とし、アジア学院は二酸化炭素削減と省エネ対策に取り組んできました。2021年度は持続可能なエネルギー使用に関してさらに積極性を増し、今後も力を入れて取り組む予定です。

### ⚡ 二酸化炭素削減

- 24.3 %  
- 20,000 kg-CO<sub>2</sub>

基準年度からの削減  
ガソリン \* 8,695 リットル分



\*ガソリン分の計算はNatural Resources Canadaの資料を基にしています。(ガソリン1リットル分は約2.3kg-CO<sub>2</sub>に相当)  
[https://www.nrcan.gc.ca/sites/www.nrcan.gc.ca/files/oeef/pdf/transportation/fuel-efficient-technologies/autosmart\\_factsheet\\_6\\_e.pdf](https://www.nrcan.gc.ca/sites/www.nrcan.gc.ca/files/oeef/pdf/transportation/fuel-efficient-technologies/autosmart_factsheet_6_e.pdf)

### 💧 エネルギー消費 (電気・灯油・石油ガス)



61,000 kg-CO<sub>2</sub>

二酸化炭素排出量  
ガソリン 26,522 リットル分

水の利用  
330 m<sup>3</sup>

灯油  
4,495 ℓ

ガソリン  
4,369 ℓ

ディーゼル  
4,348 ℓ

天然ガス  
1,117 m<sup>3</sup>

### ⚡ エネルギー生産



18,675 kWh  
累積発電量



- 8,413 kg-CO<sub>2</sub>  
二酸化炭素  
排出量削減



成木 601 本分 / ガソリン 3,658 リットル分  
累計円換算 392,182 円分

# 農村を動かす卒業生たち

Graduates at Work

ミャンマー



1

## 内戦に巻き込まれた 卒業生たち

2021年2月1日、ミャンマー軍がクーデターを起こし、民主的に選挙された政府を掌握しました。これに対し、国民は平和的に街頭に立ち、この10年で根付いたばかりの民主主義を取り戻すことを要求しました。しかし、彼らの要求を待ち受けていたのは銃と戦車と大量逮捕であり、その後数ヶ月の間に暴力は悪化するばかりでした。少数民族や軍事政権に反対する人々が武器を手にすると、軍は爆撃やこれまで以上に大規模な軍事作戦を開始しました。このように、国は内戦状態に陥っています。何千人もの市民が巻き込まれ、ジャングルに身を隠し、国内避難民となり、あるいは近隣諸国に安全を求めて故郷を離れているのです。

ミャンマーには93名のアジア学院卒業生がおり、国中のあらゆる町や村に散らばっています。アジア学院はSNSを通じて直接彼らと連絡を取り合い、話を聞いています。「状況は悪化しています。私たちは前進するどころか後退しているのです。悪夢の中に生きてのような気がします」と、ある卒業生は書いています。

ほかにも卒業生の証言を匿名で紹介します。彼らは暗い時代であっても希望と忍耐をもって語り、自分自身がすべてを失ってもなお他者のために尽くしています。

スティーブン・カッティング  
卒業生アウトリーチ課





2



3



4

1. 内戦の中にも、アジア学院卒業生が2019年に設立した「持続的開発研修センター」での農業訓練はつづく(チン州)
2. 地元YMCAに設けた国内避難民のための食糧支援。当YMCAは、アジア学院卒業生である親子の下で30年間以上、無料医療サービスを提供してきた。
3. 軍によって燃やされる卒業生とその親の家(チン州)。その後、教会も他の家も焼き尽くされたという。
4. カヤー州に集まる国内避難民。

カヤー州は「暗黒地帯」と呼ばれ、戦闘が激しい地域です。ある卒業生はこう語ります。「私たちは数ヶ月前から内戦に直面しています。私は家も畑も失いました。今、私たちの地域には何十万人もの難民がいます。私は彼らと共にいます。先月、私は医療を施すために医療チームを招きました。医師、看護師、ボランティアなど22名が駆けつけてくれました。私は農村指導者ですから、暗闇を乗り越えるために、人々とともに歩まなければなりません。」

YMCA支部の事務局長を務めている卒業生はこう語りました。「クーデター、内戦、新型コロナウイルス感染症など常に不安はありますが、神様の恵みにより、私のところは安全に過ごせています。私たちは、貧しい地域の困っている人々を助けています。医療サービスを無償で提供したり、基本的な食料品を彼らの家庭に寄付したりしています。先月は国内避難民のためのキャンプに薬を提供しました。」

別の暗黒地帯であるチン州のタントラン町はかつて人口1万人強の町でした。軍が家屋や教会、店舗を計画的に破壊し、今は何もない状態です。ある卒業生とその家族はインドへの亡命を余儀なくされました。「私とチン族のためにご心配とお祈りをありがとうございます。私たちはインド、ミゾラム州の境界の村に住んでいます。こ

こには800家族以上のチン族難民がいます。軍隊は私の家と両親の家を焼き払いましたが、私たちは以前より強くなりました。故郷に戻って新しい家を建てることを神に願い、信頼しています。今、私は同僚と共に難民のためのカウンセリング・プログラムを準備しています。教会員や難民は、身体的な支援だけでなく、精神的な支援も必要なのです。」

別の卒業生はこう書いています。「私は6ヶ月前にミャンマー北部のカチン州に移りました。ここはとても静かですが、場所によってはひどい状態です。私の神学校は閉鎖されているので、ここで新しい有機農園を始めようとしています。また、種子園のプロジェクトも続けており、種子銀行として小さな泥壁の家を建てました。」

最後に、ミャンマーのアジア学院同窓会(ARIGAM)からのメッセージです。ARIGAMは、コミュニケーションと相互支援のためのネットワークを形成している卒業生グループです。年に一度集まって情報交換をし、食事をし、笑い合い、その雰囲気は家族の再会そのものです。クーデター以前は、ARIGAM農園と研修所の設立を計画していました。現在、その計画は保留状態ですが、これまでのあらゆる出来事にもかかわらず、彼らはその夢を持ち続けています。「ARIGAM研修所は、未来の世代のために必ず設立します。」



フィリピン

## 移住の現実と農村開発

ホセ・レゾル、90年卒

**毎**日、何千人ものフィリピン人が国を離れ、外国で出稼ぎ労働者（OFW）となっています。1200万人いるOFWの多くは、使用人、看護師、医師、船員として働き、毎年約3兆円を本国に送金しています。しかし、帰国した人の大半は不当な扱いや暴力、強姦を受け、中には命を落とす人もいます。

1990年度にアジア学院の研修に参加したホセ・レゾル（通称：ジョフェル）は、フィリピンがバナナやエビだけでなく、工場や娯楽産業への出稼ぎ労働者や日本人男性のための花嫁をも日本に輸出していることを当時すでに知っていました。彼は言います。「アジア学院で研修中、ナイトクラブで働いた15歳の少女や、給料をもらっていない工場労働者などに出会う機会がありました。このときから、私は出稼ぎ労働者のための擁護活動を始めたのです。」

現在、ジョフェルは「ATIKHA 海外労働者・コミュニティ政策」の地域プログラムコーディネーターとして、西ピサヤで活動しています。この機関は、海外移住に良い影響と悪い影響があることを認識し、良い面は最大に、悪い面は最小にすることを目指しています。出国前のオリエンテーションや、家族・収入管理に関する研修などを主催しています。帰国するOFWは多くの場合、わずかな貯蓄しか持たず、すでに高齢で病気であり、最悪の場合は家族が崩壊しているため、社会復帰のためのカウンセリングや計画、技能訓練、社会起業家養成訓練などを提供しています。西ピサヤではすでに2,500名のOFWとその家族に手を差し伸べています。また、受け入れ国で困難に直面したOFWのために、フィリピンへの帰国を支援したり、虐待的な雇用主や政府機関に対抗して権利を守るために闘うといった支援も行っています。

OFWの多くは、農業設備の高コスト、農産物の低価格、地球温暖化の影響などの困難を抱える農村出身者です。この点で、アジア学院の農業研修は今なおジョフェルのために役立っています。彼は、

アジア学院は本当に私を育ててくれました。私の耳と目を開いてくれたのです。私は自分の環境と人々を理解するようになりました。私たちはお互いを愛し、思いやり、平和に暮らさなければなりません。

高見先生がある時、授業で「植物は私たちの兄弟姉妹であり、私たちと同じように水や食べもの、暖かさ、空間が必要だ。だから、『共に生きるために』、調和して生きていか

なければならないのだ」とおっしゃいました。この概念を理解するには、もっともっと学ぶ必要があります。



ポール・サンバ  
2004年度卒業生

現在ザンビア合同教会大学の  
学生部長兼学籍係長を務める

農民を債務の束縛から解放するための有機農業教育も提供しているのです。家庭が安定すれば、OFWも家族のもとへ戻ってくることができます。

ジョフェルは現在、ATHIKAの社会復帰プログラムの一環として、30ヘクタールの国有地をアグロフォレストリー（森林農業）研修所として整備しています。すでに地元のOFWとその家族を集め、有機野菜栽培の研修を実施しています。近々、この地域で一般的に用いられ土壌を劣化させている除草剤を使用せずに、他の作物も植える予定です。



# 1人の子どもに1羽の鶏

サイダティ・ムロルクウェレ、20年卒

「1人の子どもに1羽の鶏」はルワンダのNGO、ドゥファタニエのサイダティ・ムロルクウェレ（通称：サイラブ）が始めたプロジェクトです。サイラブは、2020年度のアジア学院での研修中にこのアイデアを思いつきました。目標は、若い世代に起業のスキルを教えながら責任感も育むことです。

ドゥファタニエの「希望の村」プログラムに参加している家庭の7歳から10歳までの子どもたちにそれぞれ1羽の産卵鶏を提供します。子どもたちは親と一緒に、鶏の世話の仕方、ヒナの孵化と育て方を教わります。5ヶ月後、子どもは1羽を別の子どもに譲りますが、残りは自分のものになります。このようにして、感謝と思いやりの相乗効果が生まれます。それだけでなく、子どもたちは卵の売り方を学び、お金を貯めていきます。規模を拡大して20羽に達した子どもたちには小屋が与えられます。

ドゥファタニエのスタッフは、すべてが順調に進んでいるか確認するため、毎月1回、鶏の健康状態や作業の進行状況、子どもたちに手助けが必要かなどをチェックします。時には病気や盗難などのトラブルが起こることもあります。また、餌を与える経済的余裕がない家庭もあります。そんなとき、ドゥファタニエは新しい鶏や餌と引き換えに、親たちにアルバイトを斡旋しています。

このプログラムに参加したある子どもはこう言っています。「鶏が生んでくれた卵を売ることができたのでとても助かった。そのおかげで学校の鉛筆や本を買うお金を稼ぐことができた。」また、新しい子どもたちは、鶏をもらおうとくれた子どもに感謝し、次の子どもにあげるのを楽しみにします。

## その他の活動

### エリトリア

18年卒のアディラム・レゼネ（農業省）が、国内全6地域の農業専門家81名に対して有機農業研修を実施し、土着微生物の採取やぼかし肥、魚アミノ酸作りなどのセッションを行いました。また、浜辺に豊富にある海藻を使ったバイオ肥料の実験もチームとともに開始しました。

### バングラデシュ

バングラデシュ出身のクララ・ビスワス（87年卒）は、カンボジアの合同メソジスト教会の宣教師としての働きを終えました。プノンベンのレストランチルドレン奉仕のコーディネーターとして21年間働き、子どもたちの教師、母親、看護師、そしてお姉さんとしてキリストの愛を広めました。

### オンライン

2月17日、アジア学院の卒業生アウトリーチ部門は卒業生のためのオンライン座談会を試験的に実施しました。テーマは「コーヒー〜栽培、マーケティング、コミュニティへの関与〜」で、5ヶ国から7名の卒業生が集まり、それぞれの経験を共有しました。今後、さらに多くの座談会が予定されており、キャンパスの外にも学びのコミュニティを広げていこうと考えています。

ルワンダ



5. ジョフェル（左から3番目）とOFWの家族グループと一緒に30ヘクタールの土地をアグロフォレストリー研修所として開発する予定。  
上：鶏プロジェクトの参加者とサイラブが集合！

# 会計報告

## Finances

### 貸借対照表

資産の部	2020年度末	2021年度末
流動資産	65,418,033	54,524,880
固定資産	815,545,924	769,803,154
有形固定資産	761,162,555	724,940,904
特定資産	53,986,649	44,465,530
その他の固定資産	396,720	396,720
<b>資産の部合計</b>	<b>880,963,957</b>	<b>824,328,034</b>
負債の部		
流動負債	42,173,310	31,860,663
固定負債	157,026,175	152,296,735
<b>負債の部合計</b>	<b>199,199,485</b>	<b>184,157,398</b>
基本金の部		
<b>基本金の部合計</b>	<b>1,207,651,510</b>	<b>1,211,374,835</b>
純資産の部		
翌年度繰越収支差額	-525,815,938	-571,204,199
<b>純資産の部合計</b>	<b>681,764,472</b>	<b>640,170,636</b>
<b>負債及び純資産の部合計</b>	<b>880,936,957</b>	<b>824,328,034</b>

詳しくはアジア学院ウェブサイトをご覧ください  
<https://ari-edu.org/downloads/>

### 事業活動収支

事業活動収入の部	2021年度予算	2021年度決算
教育活動収入		
学生生徒等納付金	32,219,800	7,025,600
手数料収入	32,000	45,600
寄付金	78,886,043	83,041,706
経常費等補助金	0	100,000
付随事業収入	18,683,000	23,366,369
雑収入	5,528,000	5,717,146
<b>教育活動収入計</b>	<b>135,348,843</b>	<b>119,296,421</b>
<b>教育活動外収入計</b>	<b>30,000</b>	<b>16,008</b>
<b>事業活動収入計</b>	<b>135,378,843</b>	<b>119,312,429</b>

### 事業活動支出の部

教育活動支出		
人件費支出	83,064,496	82,921,567
教育研究費	26,993,997	13,842,332
管理経費	66,105,745	63,429,208
減価償却費	41,795,395	42,966,220
<b>教育活動支出計</b>	<b>176,164,238</b>	<b>160,193,107</b>
<b>教育活動外支出計</b>	<b>980,000</b>	<b>654,394</b>
<b>特別支出計</b>	<b>0</b>	<b>58,756</b>
<b>事業活動支出計</b>	<b>177,144,238</b>	<b>160,906,265</b>

### 資金収支

前年度繰越支払資金	58,761,950
翌年度繰越支払資金	48,763,067

### 監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第7条の規定に基づき、2021年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2022年5月11日  
学校法人アジア学院

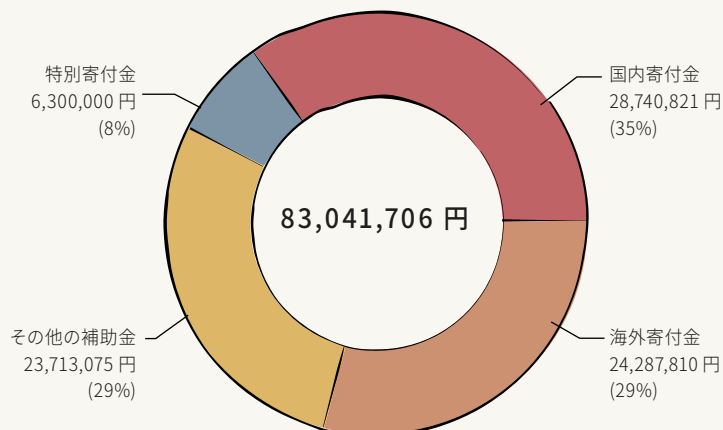
大久保知宏

監事：大久保知宏

村田榮

監事：村田榮

### 寄付金の種類別割合



## 貸借対照表

2021年度末時点での資産は約8億2,500万円、前年度末より約5,700万円減少しました。この減少分は手形の預金担保1,200万円の解約（第3号基本引当特定資産）及び減価償却約3,620万円（有形固定資産）が含まれます。また将来への備えとしての退職給与引当特定資産300万円、施設設備維持引当特定資産約240万円、合計約545万円の積立でも例年通り継続することができました。

一方負債の部は約1億8,400万円で約1,500万円減少しています。長期借入金返済（346万円）及び学校債償還（250万円）、手形返済（1,200万円）の合計1,796万円の返済をすることができました。

## 資金収支

2021年度末の翌年度繰越支払資金は48,763,067円で、前年度末と比べ約1千万円の減少となりました。これはコロナ対策や研修上必要な設備・備品（約680万円）の整備、学校債（3件・250万円）を償還したことによるものです。2020年度に調達した日本政策金融公庫からのコロナ対策融資と学債（計4,080万円）がなければ、厳しい状況でした。

## 事業活動収支

**事業活動収入 約1億1,900万円**  
**(前年約1億2,750万円、予算1億3,500万円)**

**学生生徒納付金：約700万円**  
**(前年約2,300万円、予算約3,220万円)**  
コロナの影響で海外からの学生がひとりも来日できず、国内から入学した4名分の学費収入のみとなりました。

**寄付金収入：約8,300万円**  
**(前年約7,670万円、予算約7,890万円)**  
国内寄付及び海外寄付共に前年実績及び予算を上回ることができました。コロナ関連指定寄付もあり、予算よりも大幅に増額となっています。

補助金寄付に関しては、本来入国できれば学生生徒納付金に計上される予定であった学生の奨学金（4団体分）1,370万円をご厚意により通常の寄付金としていただけることになり計上されています。また9団体から予定されていた残りの1,140万円の奨学金に関しては、取り消しまたは次年度への持ち越しとなりました。

**付随事業収入：約2,340万円**  
**(前年約2,000万円、予算1,870万円)**  
コロナ下で様々な制約がありましたが、コロナ前の2019年度の収入とほぼ同レベルに戻ることができました。困難な中であっても、工夫をして前向きに取り組んだ結果であるといえます。販売は過去最高の売上となり、オンラインでのキャンプやカレーワークショップの実施、古本市の多数回開催また書き損じハガキや切手回収等の収入も増加しました。

**事業活動支出 約1億6,090万円**  
**(前年約1億6,880万円、予算約1億7,700万円)**

**前年度より約880万円、予算よりも約1,610万円抑制**  
支出抑制の主な要因は学生数減による教育研究費の未消化と減額です。学生渡航費、奨学金、学生厚生費、県外や遠方への研修旅行の縮小化やオンライン授業の導入等により、予算比50%、約1,300万円減となりました。また海外出張・活動自粛も支出減に大きく影響しています。人件費及び管理経費は、ほぼ予算通りとなりました。

(事務局長 佐久間 郁)

みなさまの開発途上国に対する  
思いをアジア学院に託して  
ください。

アジア学院で学んだ卒業生たちが自ら  
の手で、公正かつ平和で健全なコミュ  
ニティを作っていきます。

### 郵便振替

振込口座 郵便振替 00340-8-8758

口座名義 学校法人 アジア学院

### 銀行振込

足利銀行 西那須野支店

口座番号 112403 (普通預金)

口座名義 学校法人 アジア学院

オンライン/クレジットカード

<https://ari-edu.org/donate/>





## 🎓 2021年度 卒業生

### 農村開発科

- |     |                     |
|-----|---------------------|
| ギニア | (1) ファトゥマタ・ディアライ・パー |
| 日本  | (2) 加藤 圭介           |
|     | (3) 松井 潤            |
|     | (4) 岡田 英里           |